

## ? Hib髄膜炎って何?

Hibとは、ヘモフィルスインフルエンザ菌b型という細菌のことです。最初に発見されたときにインフルエンザ感染者から発見されたため、この「インフルエンザ菌」という名前がつけましたが、皆さんの知っているインフルエンザウイルスとはまったく違います。

このHibという細菌が、ヒ、からヒトへ飛沫感染し、鼻咽腔に保菌され、これが病原菌となり、肺炎や喉頭蓋炎、敗血症などの重篤な全身性疾患を引き起こします。なかでも髄膜炎(脳や脊髄を覆う膜)に感染するHib髄膜炎は最も頻度が高く、予後が悪い病気です。

## Hib髄膜炎はいつかかるの? どのくらいの子もたちがかかるの?

多くの場合は生後3か月から5歳になるまでの子どもたちがかかります。特に2歳未満のお子さんに最も多いので、要注意です。毎年全国で約600人の乳幼児がHib髄膜炎にかかっていることがわかっています。

## ? Hibワクチンの安全性は?

Hibワクチンの主な副反応は、接種部位の赤みや腫れで、そのほか発熱が数%報告されています。これらは通常一時的なもので、数日以内に消失します。

また、Hibワクチンは製造工程にワン由来の成分が使用されていますが、海外で使用開始されてから、ワクチンが原因でTSE(トランスmissible海綿状脳症)にかかったという報告は現在までありません。

## ? Hibワクチンの接種は どうすればいいの?

かかりつけの小児科で接種を受けることができます。望ましい接種スケジュールは、生後2~7か月で開始し、4~8週間あけて3回、その1年後に追加接種1回の計4回です。この時期は、百日せきジフテリア破傷風混合(DPT)ワクチンの接種時期でもあるので、同時接種が可能です。また、すでに望ましい接種開始年齢を過ぎていても、5歳までは接種することができます。詳しいことは、かかりつけの医師にご相談ください。

## ? Hib髄膜炎に かかるとどうなるの?

Hib髄膜炎にかかると発熱、頭痛、嘔吐、不機嫌、けいれんなどのかぜのような症状がみられ、そのうちの約5%は死亡、約25%に後遺症(聴覚障害、発達遅延、神経学的障害など)がみられます。

## ? Hib髄膜炎の治療法は?

Hib髄膜炎は、初期症状がかぜ症状と区別がつきにくく、簡単な検査では診断が付きません。また早期診断がついても、現在では耐性菌\*が増えているため治療が難しくなっています。このためワクチンの研究が開始され、1997年に米国で発売開始されたのがHibワクチンです。世界保健機関(WHO)では、1998年にHibワクチンを乳幼児への定期接種ワクチンに推奨し、現在までに世界120ヵ国以上で導入されており、それらの国ではHib髄膜炎は、すでに過去の病気となっています。

\*耐性菌: 薬に対して抵抗力を持っていた菌のこと(抗薬薬が効きにくくなります)。



### Hibワクチンの接種スケジュール



- 接種開始年齢が 7ヵ月齢以上 12ヵ月齢未満 の場合
  - 初回免疫: 通常2回
  - 追加免疫: 初回免疫後おおむね1年後に1回
- 接種開始年齢が 1歳以上 5歳未満 の場合
  - 通常1回
- 他のワクチン(数回)との接種間隔
  - 生ワクチン(BCG、ポリオ、MRなど) → 27日以上
  - 不活化ワクチン(DPTなど) → 6日以上
  - ただし、医師が必要と認めた場合には同時接種が可能。